

新潟教育研究所

令和7年2月21日発行 第56号

公益財団法人新潟教育会
新潟教育研究所

〒951-8104 新潟市中央区西大畑町590-3 新潟教育会館

TEL・FAX 025-222-2971
E-mail kenkyujo@kyouikukai.jp

中堅頑張れ

聖籠町教育委員会
教育長

近藤 朗



国の教育を巡る改革案が矢継ぎ早に示され、実現されています。すべては子どもたちの健やかな成長のためと受け止めていますが、教育現場ではこれらの改革を消化できているでしょうか。昔から、学習指導要領改訂の趣旨は校門の前までは届くものの校舎の中には入らない、廊下までは届いているものの教室の中までは入らないと言われてきました。近年の改革はどこまで浸透しているでしょうか。平成27年（2015年）の電通の高橋まつりさんの長時間労働による自死をきっかけに勤務時間の長さが問題視されるようになり、学校も「ブラック」と称されました。近年の改革はここからスタートし、新型コロナウイルスの影響を受け加速してきたように思えます。

直接子どもたちの学びにかかわる施策である、平成29年からの学習指導要領の改訂、令和元年からのGIGAスクール構想を取り上げてみましょう。このことに対して最も衝撃を受けたのは、経験年数で区分することは乱暴かもしれませんがベテランの先生方に多かったのではないのでしょうか。およそ30年間積み上げ、身に付けてきた学習指導のノウハウが一撃のもとに崩されたような感覚をもたらしたことでしょう。その瞬間、シャッターを下ろした人も多かったのではないかと思います。

しかし、ベテランの先生方は今の中堅以下の人たちが知らない貴重な経験を財産としてもっていると思います。複式学級での直間指導、班学習、個別指導、ガリ版印刷、ワードプロセッサ、トラ

ペンアップ等々、懐かしい単語が浮かびます。そして、どのようにすればそれらがうまく機能するのか考え、協議し、実践をしてきたはずです。また、昔から大切にしてきたことに「書く」「聴く」「話す」があるはずです。現在、改革によって学校で起こっている変化は昔と何ら変わらないものなのです。変化に挑戦する気概を若手に示すことがベテランの先生方の役割ではないのでしょうか。

ベテランの先生方のこのような力をお借りしながら、重要なポジションを占めているのが中堅の先生方です。ベテランの先生方のもっている宝を吸収し、若手の先生方をリードして共に高まり合おうとするムードを高めることが、学校における授業改革推進に結び付くものと考えています。

聖籠町教育委員会の教育未来課には割愛で二人の中堅の先生に来てもらっています。私の発する難題に苦しみながらも課長の助言を得ながら課員と共に方策を見出し、提案してくれています。組織として機能していることを実感しているところです。中堅には、上と下を上手に操りながら目指す方向に向かって戦略的に推進する楽しみが与えられています。世の中では個人主義の風潮が見られていますが、子どもたちを育む私たち教職員は、チームとなることで個人の力を高めることはもちろん、課題解決に向けて大きな力を発揮できるものと思います。その中核を担うのが中堅です。変えないことは罪であるという意識のもと、一歩前へ歩みを進めてほしいものです。

学校安全文化の醸成

新潟教育研究所 教育アドバイザー

松井謙太



年が明け令和も七年となりました。昨年元日の能登半島地震では県内でも多くの家屋や学校施設に被害が出ました。改めてお見舞い申し上げるとともに一日も早い復旧を心から願います。

退職後これまで心に引っ掛かっていた幾つかのことを調べ始めています。自分が学生だった昭和58年に発生した日本海中部地震もその一つです。遠足で男鹿半島に来ていた合川南小学校児童と引率者全員が津波に襲われました。13名が犠牲となり訴訟にも発展しています。これまで御遺族、現地住民、関係者からの聞き取りや記事、記録の閲覧等をする中であることに気が付きました。それは、合川南小学校の事例と東日本大震災での大川小学校の事故に類似点が多いことです。

まず、男鹿半島では地震発生時には土砂災害が心配なため海岸に逃げるべしという伝承があり、日本海側に津波は起きないとされていました。大川小はハザードマップの域外にあり、そもそも学校が避難所に指定されていました。共に想定に甘さがあり、大きな津波の来襲は想定外でした。

次に、この対応ではよくないと考えた職員がいても、立場が上の方や在職年数の長い地元の方の声が通ってしまう所謂権威勾配があり判断に影響を与えました。医療事故の要因として語られるリーダーと他のメンバーとの力関係にも似ています。

また、生き残った子供たちの証言が認められにくかった点も同じです。早い段階でメディアの取材を受けた子供たちの声や後々のヒアリング調査の結果も究明の場では生かされていません。

その他に、丁寧さを欠く保護者への説明や、教育活動に対する日常的な安全管理が不徹底であるなど、二つの事故には類似点がたくさんあります。

そうした事故の要因を全国の教職員は共通の財産として自校のマネジメントに活かしていくこと

が必要です。一度辛い経験をすれば腹の底から分かるのでしょうかがそういう訳にはいきません。

さて、航空会社はCAの採用に当たり、多様な乗客に直接接し快適に利用してもらうための知識やスキルが必要と考えるでしょうし、パイロットには万難を排して安全に機体を離発着させる能力が求められます。つまりCAとパイロットは適性に応じて別枠で採用されるわけです。私たち教師は教諭として採用されますが、随分な人数が適当な時期に管理職となります。いくら経験豊富で優秀なCAだからといってコックピットの仕事をさせられないのと同様に、校長・教頭であるならば管理職としての能力、とりわけ学校安全に係る指導と管理について十分な研修を積む必要があるのではないのでしょうか。

ただこれは管理職だけに求められることではありません。災害や事件・事故が発生した際には、児童生徒等の安全を守るために全教職員が協力的確に対応しなければなりません。また、安全教育の充実を図るには、教職員自身が自然災害などの安全に関する知見や指導すべき内容を十分に把握しておくことが重要です。そうした考えの下、学保法が改正され校内職員研修に学校安全を位置づけることが義務化されました。また、令和元年度からは、大学の教職課程において学校安全について必ず修得することとされました。学校安全の勉強をしないと教員免許を出せませんよと国がいつているのです。

学校安全の営みは「これで安全だ」というゴールに達したという感覚が得られることこそ真に回避すべきことであり、終わりになき取組です。それだけに全ての教職員で学校に安全の文化を醸成していく地道な取り組みが必要だと考えます。

新しい風のむこうに

新潟教育研究所 研究員
宮川由美子



はじめに

この素朴な社で、新しい年が公私ともに穏やかであるようにと祈りを捧げて帰宅した、その日の夕方起きたあの地震から丸一年。長かったのか短かったのか、そのどちらかはぶつかる悩み毎に異なる。今年の元旦の社はいつになく賑わっていた。お日様が顔を出してくれてたせいかな。初お目見えのキッチンカーまで鎮座している。

1 教室の昭和は遠くなりけり

冬休み明けに日本の伝統音楽を学習することを、年末の最後の授業で予告しておいた。年末年始期間は「日本」の多くのことがクローズアップされ、行事や音楽を目や耳にするだろうと考えたからである。甘かった。高校生の多くは、テレビを観ない、新聞を読まない、家族構成人数が少ない…。それでも、しぶとく問うてみた。「高校生ってお年玉貰える?」「貰ったのはどうするの?」「お餅食べた?」「餡子派? きなこ派?」「百人一首ってやったことある?」そして、肝心の音楽。お正月の定番を聴かせた。「聴いたことある人?」ほとんどが挙手したので、ホッ。「デパートで流れていた。」……さすがに曲名までは知らなかった。「春の○」この○には漢字なら一文字、平仮名なら二文字入るわよと大ヒント。春の虫、春の風、春の雪、様々な春が出るわ出るわ。「お正月」はハロウィンやバレンタインより関心度は低いらしい。

明治に生まれ、大正・昭和と生きた人たちも、降りしきる雪を眺めながら、明治は遠くなりけりと詠まずにはいられなかったのだろうか。

2 カメラが観た学校

久々に映画を観た。「小学校～それは小さな社会～」ありふれた小学校がくれる新たな気付き。山崎エマという女性監督が、自らの体験をベースに記録したかったというドキュメンタリー映画。「6歳児は世界どこでも同じようだけれど、12歳

になる頃には日本の子どもは日本人になっている」というメッセージからスタートする。今の日本では、どちらかというネガティブな「集団性の強さと協調性の高さ」を、公立小学校の一年間の全教育活動を見続けたことで「集団の中で共に学んで、共にかかわって成長していく」と言い切っている。

「自動採点システム」が導入され始め、先生方の働き方改革に繋げたいとテレビから流れてきた。○と×を採点するのだろうか。「もう～○○さんたらっ、ここはきちんとはねると言ったじゃない!」「よ～し、◇◇さん、理解したな」などと子どもたちの息づかいを感じながら採点をしていた私なんかは、時代遅れもいいとこか。

映画のラストメッセージ「今、小学校を知ることとは未来の日本を考えること」

3 自分ファースト

年明け、県立教育センターでお世話になったK先生からメールをいただいた。いつもながら、地震後の我が家の状況をいたわってくださる内容。返信に、「退職して10年になります」などと綴ったら、「外にどんどん出てください。体が動くうちにね。」そうか、あちこちにガタがきているのは事実だが、体が動くうちにか。そう思ったら俄然焦ってきた。海外にいる知人に会いたい、桜をゆっくり眺めてみたい、ぼーっと電車で揺られて目的地を決めずに旅してみたい……。

おわりに

お正月の風物詩としての「年賀状」。知人友人親戚から届いた年賀状の多くに「年賀状じまい」が綴られていた。かく言う私は、まだ、年賀状という気分にはなれず出さずじまいだった。冬が遠のいて春の足音が聞こえてくる頃、修復された我が家の様子や老母娘の近況を綴って、懐かしい方々の住所をしたためようか。

Q-Uを生かした学級づくり ～Q-U結果を分析し学び合う 学級集団に育てる～

新潟県立大学
非常勤講師

吉澤克彦



田上小学校へは昨年度3度におじゃました。そのうち2回は今回の依頼と同じ各学級のQ-U結果を先生方と分析し今後の方向性を探るものだった。回を重ねるごとに先生方の学級の児童一人一人に対する理解、そして学級集団の把握が的確になっている。また、全担任の学級分析シートも用意されていて充実した研修になった。

Q-Uは、NRTやCRTと同じ図書文化社が提供する学級集団へのアセスメントができる有料のアンケートで、学級集団の状態を把握できるだけでなく、いじめや不登校、問題行動への予防、早期発見、そして対策を検討する資料になる。

児童生徒が各項目に回答している一つ一つ、そしてその集まりを全体像として可視化できるQ-U結果は、児童生徒理解、学級集団把握のための宝の山だと感じている。先生方とQ-U結果を共有し、気になる児童について語り、学級集団を今後どう育てていくか話し合うことや結果の見方やアドバイスを伝えることは、私にとっては楽しい時間だ。

田上小学校では、全体研修会だけでなく、高学年、低中学年に分けての研修の時間を設定してくれていた。先生方の話す時間も増えるし、実際の児童を関

わっている先生方で話すことができるよさがあった。私も、先生方との距離が近く、伝えるべき事をほぼ伝えられ、今後の方向性も検討できたと感じている。

例えば、授業中に発表することが苦手だと感じている児童が多い学級に、2人組で相談してから発言とか、書いてから発言というステップを踏んで徐々に発言や発表に慣れ、自信をつけていってもらうとか、学級に発言を揶揄する雰囲気がある場合には、聴き合う関係を構築し、違いを認めること、互いを尊重できる活動を工夫する、ふわふわ言葉チック言葉のエンカウンターをやるなど、具体的な実践レベルで検討できた。

また、次年度から2クラスが1クラスになる2年生に、3学期に徐々に一緒に行う授業やイベントを設定したり、トラブルになりそうな児童同士への今年度中のアプローチを工夫したりする提案をした。

それにしても田上小学校の先生方は、学級経営に真っ直ぐで、クラスの児童を好きだと伝わってきた。最近では、担任の負担軽減や相性の問題などで代わる代わる学級を担当したり複数で担当したりということもあるが、やはりじっくり学級経営するのは醍醐味でありやりがいにつながり先生方も成長する。

教育アドバイザーを要請して

田上小学校 荒井 純

吉澤克彦先生からは、Q-U分析結果に基づく学級集団の理解と児童一人一人の理解、よりよい人間関係づくりのためのSST公開授業、学級経営に取り組んで困っていることや不明なことについて意見交換等、2年間で段階的にご指導いただきました。



Q-Uの結果をもとに、様々な角度から考えられる要因や改善策を丁寧にご指導いただき、今後重点的に支援すべきことを明らかにすることができました。全職員が学級経営について深く学び合う研修となりました。